

(技術名) 養殖ヤイトハタで発生した粘液胞子虫性やせ病の対策							
(要約) 本県の養殖ヤイトハタで粘液胞子虫性やせ病が発生した。その原因は、粘液胞子虫エンテロミクサム・レーイの腸管上皮への寄生によるものであることが明らかとなった。病魚は著しくやせ、重篤個体は斃死するが、現在のところ治療に使える水産用医薬品がないため、感染拡大防止には、病魚の早期発見と陸上処分が最善の対処法である。							
水産海洋研究センター 海洋資源・養殖班					連絡先	098-994-3593	
部会名	水産業	専門	水族病理	対象	ヤイトハタ	分類	普及
普及対象地域	沖縄県内の魚類養殖場						

[背景・ねらい]

沖縄県において、平成20年2月に初めて、陸上養殖のヤイトハタが著しくやせる魚病の発生が確認された。他県の養殖場では、トラフグやマダイで粘液胞子虫性やせ病（以下、「やせ病」）による被害が報告されており、ヤイトハタ養殖においても、今後、重大な問題となる可能性があるため、早急な実態把握と原因解明、対処方法の検討が急務であった。

[成果の内容・特徴]

1. 病魚の外部症状として特徴的なものは、十分な内臓脂肪を蓄えているにもかかわらず、頭骨や背鰭基部の骨が浮き出る程やせていることであった。また、緑肝（肝臓の緑変）や腸管壁が薄くもろくなっている病魚も多く観察された（写真1）。
2. 病魚の腸管上皮組織内にエンテロミクサム・レーイ (*Enteromyxum leei*) の寄生を確認したことから、当該病魚は、やせ病に罹患していると判断した。また、エンテロミクサム・レーイは、病魚の腸水や排泄物中にも確認できた（写真2）。
3. 腸管上皮で増殖したエンテロミクサム・レーイは、排泄物（写真3）と一緒に体外へ排出されるため、これを健康魚が経口摂取することで、魚から魚へと伝播した。
4. 養殖場での聞き取り調査によると、病魚が発生した時期の水温は、21～26℃であった。
5. 現在、やせ病の対策に使用できる水産用医薬品やワクチンはない。このため、飼育魚が急激にやせたり、斃死が観察された場合には、直ちに水産海洋研究センターへ連絡し、やせ病と診断された場合は、感染拡大防止のために、病魚を速やかに取り上げて、陸上で処分する必要がある。

[成果の活用面・留意点]

1. この成果は、ヤイトハタ養殖におけるやせ病対策及び防疫指導に活用できる。
2. 病魚は、やせ症状と緑肝を呈することから、餌料性疾患と誤診してしまう可能性があることに注意する必要がある。
3. やせ病が疑われる養殖魚は、腸管スタンプ標本の染色観察や PCR 法による診断を行う必要がある。

[具体的データ]



写真1 やせ病病魚の症状

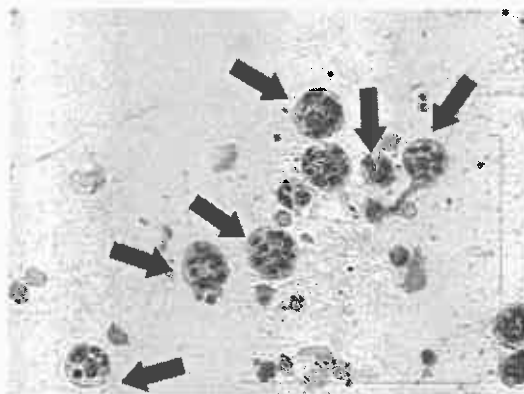


写真2 腸水中のエントロミキサム・レイ(矢印)
(デイブ・クイック染色)



写真3 病魚の排泄物

[その他]

研究課題名：2006水02 養殖魚介類の魚病対策試験

予算区分：県単

研究期間：2006年度～2010年度

研究担当者：知名真智子、中村博幸、玉城英信、牧野清人、平安名盛正

発表論文等：病魚を用いて粘液胞子虫駆除試験終了後に投稿予定